

2024 年度奨学生選考総評 高橋修宏

すでに昨年、2023 年度口語詩句賞の選考が終了しているため、応募資格のある皆さん（高校生、大学生、大学院生）は、賞応募とダブらないように自らの佳作入選作を 10 点選出しなければならない。

あくまで口語詩句賞は、その提出された作品に対する評価を通じて順位をつけ、そして賞を決するもの。それに対して、この奨学生選考は順位ではなく、その作者に秘められた、いわば〈可能性〉をはかり、それに託すことではなかろうか。

このような観点から選考に臨んだが、やはり佳作入選作からの 10 作品の自選力が気になってしまった。おそらく月次の佳作であっても、そこには作品の評価をめぐって上位から中位まで尺度の差異が含まれるはずである。また、当該月全体の作品レベルの差異からも影響されざるをえない。それは、選者としての実感でもある。

毎月の選考において注目する作者であっても、何故このような 10 作品なのか。何故、あの印象深い作品は自選からもれているのか。今回は、そのようなことを気にしながらの選考となった。そのため、すぐれた作者であっても終盤で外さざるをえなかった反面、その将来への、次の作品への〈可能性〉を自ら探りあてようとしていると感じた作者を優先して選出させていただいた。

とりわけ今回、このような視点で特に注目した作者は、次のような皆さんであった。まず、高校生の二人から注目した作品を掲げてみたい。

西野奏子（筆名、有野水都）

・小鳥くる

ハンバーガーショップのあかり

・冴返るティーカップに爪あたる音

「小鳥くる」、「冴返る」など伝統的な季語と自らの微細な身体感覚や現代の風俗との取り合わせが巧み。ここから、いかに自らのオリジナリティを獲得するのかがテーマか。

金光舞（筆名同じ）

・ひとつ、欲しい

君をつくる為の部品を

君が持て余しているなら

現在の所与の関係性の中で、懸命に生きようとする息づかいを感じる。その向目的とも呼べる姿勢に打たれた。

次に大学生及び大学院生の作者を — 。

吉沢美香（筆名同じ）

・蝶の昼さりさりさりと砂時計

・耳朶の産毛のように石鹼玉

すでに口語詩句賞の選評でもふれたが、いわゆる季語を自らの微細な身体性に引きつけた手法が巧み、現代の実感も通う。また、オノマトペなどの活用によって新鮮な世界を拓きつつあるようだ。

塩田きよら（筆名、汐見りら）

・過去形で未来を問われ

もう叶わない夢があることだけ

わかる

たしかな質感をそなえた言葉を用いながら、その先にある情動や異和感を描き出そうとしている。地上的な強かな主体を感じる。

大嶋碧月（筆名同じ）

・半熟のくしゃみのような射精感

のような爆撃（まだ続けるの？）

一読、熱量の高い言葉、過激に見える言葉を用いながらも、伝えようとする何かを確かに感じさせる。アイロニカルとも呼べる批評性も、この作者ならではの魅力。

小池弘実（筆名、ひろみ）

・雨、とだけ返信が来て

胸底の

小さな街に雨が降りだす

ゆるやかに屈折する文体の中に、どこかナイーブで静謐な気配がただよう。そのナラティブな語りから、複層化した詩的主体が生まれるようだ。

中矢温（筆名同じ）

・原っぱを走る端から八月さ

・一月の羊一頭ずつ食べる

俳句の定型や文体を踏まえながらも、言葉をめぐる音や視覚性を活用し、クールな口語体に仕上げている。いわば、コンテンポラリーな言葉派か。

小宮颯人（筆名同じ）

・爆発の中ほどまでお進みください

君が始めた戦いだろう

日増しに不穏さが覆いつくす現実。何より、そのような情況に対する感度に注目した。口語を活用することによって、どこか強かな主体とリアリティを手に入れている。

吉富快斗（筆名同じ）

・転校をくりかえしても猫の恋

・冬ざれか手を見るだけにして帰る

とりわけ、俳句の定型を踏まえた作品がユニーク。季語を活用しながらも、作中で脱臼

させ再構築することで諧謔やユーモアを生成させている。

また、選考の終盤まで迷った作者であるが、次のような作品は忘れがたい。いずれも月次選考において上位で評価した作品である。

松下誠一（筆名同じ）

- ・具の遠いおにぎりの具に辿りつく

小笠原風花（筆名、あお）

- ・詩はいつもひとりで生まれてきた
　　ような顔をするから油断できない

奥村俊哉（筆名、長谷川柊香）

- ・ピアノさぼった僕を
　　殴る母
　　ねぎのにおいがした

佐久本倫歌（筆名、雲理そら）

- ・天国じゃみんな、名前を忘れてて
　　さいごのごはんの献立で呼ぶ

清水将也（筆名、源楓香）

- ・信号が変わるので待つ僕たちの
　　待つこと以外は異なる人生

一方、次の皆さんは今回の入選は逃がしたものの、その先の〈可能性〉を秘めた作者として推させていただいた。

日下部友奏（筆名）

- ・フトコーフトコー
　　また小鳥来る

小島涼我（筆名）

- ・何も話さない時間があることが
　　幸せとして夜の首都高

玻璃（筆名）

・茫野にセーラー服の浮いている

永山逢海（筆名）

・朝

画家は

庭の木すべての葉に

白の

色鉛筆の光をのせて